



事務局

安心できる地域ケアを考える会

〒675-0019 加古川市野口町水足 1874-1
TEL (079) 421-7417 FAX (079) 422-8630

<http://www12.plala.or.jp/anshinchiki/>
E-mail: anshin-care@maia.eonet.ne.jp

今年も、赤ちゃんから終末期まで、安心して暮らせる地域について話し合います。今回のテーマは、『病気と介護』、『エンディングノート』、そして、『こうのとりのゆりかご(赤ちゃんポスト)』です。

今年初めての定例会。新年を迎えて西村代表より挨拶がありました。

最近流行しているノロウィルスや鳥インフルエンザなど、感染症にかかった人を医療機関や介護施設などで、受け入れを拒否する事態になっている、当然防御は必要であるが、支援もしていかなければならない。これらは感染症に対する認識不足からおこるものであることから、今後は感染症対策を取り上げてはどうか、という提案がありました。

また、超高齢社会の中、特に85歳からは医療が必要な人が多く、20年後には普通の老人が減り、重篤な老人が増える、医学では老化を病気と捉えていたが、老化に伴う気力の低下は医療では支えられない。介護などの見守りが今の倍以上必要である。そのためには様々な工夫や知恵が必要であり、この会で話し合っていきたい、と締めくくりました。

リレートーク



エンディングノートは、なぜ書けないのか

リレートークは、行政書士、整理収納アドバイザー、終活カウンセラーなどの資格を持つ竹裏(ちくり)さんです。初めに、エンディングノートがなぜ書けないのかを説明、その理由に納得しました。それは、物探しをしなければ書けないからです。保険や預貯金、寺や墓のこと、自分史を書くにも何年に入学、卒業したか、ましてや、終末期や介護のことは知識が必要なのです。

竹裏さんは、遺品整理などを支援する中で、物を片付けることの大切さに気付いたそうです。断捨離(だんしゃり)という言葉があるように、「今使わないものは捨てる」という暮らし方を勧めています。

火事とお葬式だけは地域で助け合っていたけれども、現在はそれすら壊れていて、家族葬が増えています。また、生まれたところで暮らし続けることが困難になっていること、3組に1組が離婚、その6割が再婚し、家族関係が複雑になり相続で揉めることも増えているなど、これまでの常識が通用しなくなっています。自分らしい締めくくり方ができるよう、それぞれが学び、実行していかなければならない、と気づかされました。

参加者募集

安心できる地域ケアを考える会は、誰もが安心して住みなれた

地域で暮らし続けることを目指す会です。メンバーは、一般住民から医療・福祉専門職まで、幅広い分野で構成されています。みんなで一緒に考えていきませんか？

次回の定例会

2月25日(火)

19:00~21:00

場所:リバティ2階

参加費 200円(資料代)



※申し込み不要。団体でご参加の場合は、準備の都合上、事前にご連絡をお願いします。

今日の意見交換は、テレビドラマで紛糾している問題をテーマにしました。ドラマの放送をきっかけに、こうのとりのゆりかご（赤ちゃんポスト）の慈恵病院が BPO（放送倫理・番組向上機構）の放送人権委員会に審議を求める申立書を送付しました。問題点として、赤ちゃんポストに預けられた主人公のあだ名が「ポスト」で、児童養護施設の施設長が子どもたちを犬に例えるような場面を挙げ、「施設職員や子ども、里親や里子、こうのとりのゆりかごに預けられた赤ちゃんが傷つかないようにしてもらいたい」と主張、全国児童養護施設協議会も、「内容が現状とかけ離れている。里親制度も実態と違う」と批判し、放送中止を要請した問題です。実際に「あんなところに住んでいるの?」と言われた児童もあり、子どもの人権を守る立場から、挙げられた意見です。定例会の日は、全スポンサーが CM 中止を決めたというニュースが流れたことや、慈恵病院らに対して反発する意見が数多く寄せられているところも紹介して、意見交換となりました。

「里親になるには 1 年以上に渡っていくつもの審査をされ、本当に一生懸命に育てておられる知人の苦勞を知っているので、ドラマの 1 回目を見ただけで嫌悪感を持った」「つけられたあだ名は『ポスト』や『ドンキ(鈍器)』、施設に来た理由を施設長が電話で話すのを他の子どもたちが聞いていた、という設定は受け入れにくい」等と、慈恵病院が BPO 審議を求めることに肯定的な意見と、「テレビの影響は大きく、例えば『納豆が健康によい』と言えば、翌日にはスーパーから納豆が無くなる現状にあり、見る側にモラルが必要」「児童養護施設を知ることや、虐待について関心を持つきっかけになるのでは」「現実にはもっと酷いこともあり、テレビはまだまだ綺麗事、それより虐待が起こらないような取り組みが必要」「厳しい環境の中で、その子どもがエネルギーに変え力を付けられるよう支援していかなければならない」「ドラマを中止してはいけない」などの意見となりました。

後日、ドラマの内容を一部変更するといった報道がありました。また、慈恵病院は改めて「病院の考え方」をホームページに掲載、一時はアクセスが集中して読むことができませんでしたが、関心のある方は是非読んでいただきたいと思います。

認知症にやさしいまち かこがわ 2014



2月1日総合福祉会館で「認知症にやさしいまちかこがわ2014」が開催されました。昨年に引き続き、安心できる地域ケアを考える会も共催させていただきました。

午前午後、2回に分けて行われた「認知症なんでも相談会」では、医師、歯科医師、薬剤師、看護師、弁護士、社会福祉士、精神保健福祉士、理学療法士、作業療法士、社会保険労務士などのそうそうたるメンバーが相談に応じました。

午後からは、浜の宮中学校演劇部による認知症劇と「誰もが住み慣れた地域で安心して暮らすために」のテーマでNPO法人このゆびと一まれ理事長の惣万佳代子氏が、講演されました。

認知症劇は、今までしっかりしていたおばあちゃんが、認知症を発症する。そんなおばあちゃんを家族と地域の人と一緒に支えていくというものでした。地域の民生委員役や地域包括支援センターの相談員役などの出演で、実在に沿った内容がとてもわかりやすく、会場から大きな拍手が沸き上がりました。

「富山型デイサービス」の創業者、惣万氏の講演は、富山弁炸裂のパワーがみなぎる内容で、会場の笑い声が絶えませんでした。赤十字の理念である「明日の100人より今日の一人を助ける」と、アメリカ大統領だったケネディ氏が言った「この国が君たちのために何ができるかではなく、君たちがこの国のために何ができるかを考えてほしい」という言葉が好きという惣万さん。惣万さんの力強いメッセージは「地域の中で自分は何の役割を担うのか」「何ができるのか」をそれぞれに問うきっかけを作り、参加者は熱い想いを共有することができました。